

令和7年度

第3回丹後「子育て」サポート協議会の概要

1 日時 令和7年12月15日(月) 9:00~11:00

2 場所 京都府宮津総合庁舎 別棟2階講堂



3 出席者 丹後「子育て」サポート協議会顧問1名
杉岡秀紀(福知山公立大学地域経営学部准教授)
丹後「子育て」サポート協議会委員3名
多々納智(京都府宮津天橋高等学校 教諭)
野木俊宏(京都府立丹後海と星の見える丘公園 園長)
稲本朱珠(与謝野町高校魅力化コーディネーター)
各市町教育委員会担当者
事務局(丹後教育局)

4 協議「高校生意識調査アンケートの結果分析について」
「丹後の『子育て』関係者の協働へとつながる協議会メッセージの発信方策について」

ア 高校生意識調査アンケートの結果から

- ① 「丹後地域が好き」の回答9割という結果と18歳までの探究活動の関係
- ・「丹後地域が好き」の回答が多いのは小学校のふるさと学習の成果だと感じている。小学生が学習の中でであうヒト・モノ・コトの雰囲気として伝わるよさが、後々の結果へと繋がっているのではないか。
 - ・一方で、中学校の総合的な探究の時間はパッケージ化され、生徒の心に訴える内容になっていない印象を受ける。
 - ・高校の探究活動が9割の回答に対して一定の効果を上げていると感じている。そのためには、フォーマット化された学びではなく、意思や気概がある状態で、地域の大人と向き合えることが重要になる。
 - ・高校生へ「ふるさとの自慢」を問うと、回答の多くが「海山川がある」という一般論に留まるが、自分の身近なヒト・モノ・コトに目が向くように問うことで回答は変わる。
 - ・他者評価が地域への誇りを高めることに影響するという調査結果があり、高校の探究活動では高校生が、地域の方々という「他者」に出会い、互いに何年も関わり続けることで、そのつながりが、高校生の進路選択にも発展していく。
 - ・フィールドワークの講師を務めた際に、丹後には、こちらが話すことへの感度のよさを感じる子どもが多いと感じた。そういう子どもが育つ地域性も結果と関連があるのではないか。

- ② 9割の「好き」という回答の核心に目を向ける
- ・サケが遡上する川があることを知らない地元の高校生がいる。これほどの魅力的な地元のよさが小・中学校の間でも話題にならなかったということか。
 - ・このような現状がある中で、「丹後地域が好き」という回答が多いことに疑問を感じる。本当のよさを深くまで認識せず、感覚的、表面的な「好き」なのではないか。
- ③ 「丹後地域が好き」の回答理由を問うことについて
- ・理由を問うことで、高校生が地域の課題と認識している項目と「丹後地域が嫌い」と感じている部分の繋がりが見えてくるのではないか。
 - ・理由を問うということは、探究活動の中でも何度でも行っている。問いに対して言葉にすることが大切である。これまでアンケートに回答してきた高校生も、アンケートの設問に出会い、これを機に自分の成長や自立について考えたのではないか。
 - ・自然の中で遊んだり、人と関わり合いながら物事に取り組んだりする中で「楽しい」と思える経験が「好き」へとつながる。好きか嫌いかではなく、どんな経験をしたのかを掘り下げられる設問としたい。
- 令和8年度から問3(1)「丹後地域が好きですか」の回答理由を問う。
- ④ 地域のよさの核心に触れられる環境づくり
- ・子ども達の心に響く地域のよさを伝えるのは大人の責務ではないか。
 - ・その一方で、ふるさと学習を指導する教師側の感度の低さを感じることもある。
- ⑤ 地域のよさを学ぶための学習の在り方
- ・山や川で遊ぶことや火を扱うことなど自然に関わる体験を積み重ねれば、学校で教わらなくても学び、理解することができる。学校教育が設定しているから理解を求めたくなる。
 - ・多世代が地域で集まり、関わり合う場の空気に触れることや観光に訪れた人からの評価に触れることで自然と地域のよさを感じることができるのではないか。
 - ・教師も含めた地域の大人が、地域の知らない一面を知ろうとすることで、身近な地域の素敵なものに気付くことも重要である。
 - ・今の保護者世代は自然体験活動の経験が乏しいと感じている。例えば、小・中学生が実行委員となって主体的にイベントを創っていく中に保護者が参加者として学ぶ機会があってもいい。保護者世代にも経験値を補填する場が必要である。
- ⑥ 過疎化を地域課題と捉える高校生が増加傾向
- ・地域から高齢者の姿までもが見えなくなっている。高齢者介護施設への入所により一人世帯が家を空けることが増えている。昔は畑仕事をする人、漁に出る人、散歩する人などを目にするのがあったが、今、その姿も消えている地域がある。
 - ・地域を支えていた身近なスーパー・商店も撤退・閉店し、高校生が幼い頃に見ることができた人々の営みがなくなってしまったことに高校生が何かを感じている結果ではないか。
- ⑦ 小・中学校の総合的な学習の時間で学習した自分の市や町の学習についての問4(3)「自分の市や町について理解が深まった」の削除について
- ・理解できているかどうかより愛着や誇りが深まったかどうかを重視したい。

- ・地域への愛着は誇りに影響し、誇りは地域に対する行動に大きく影響する要素という調査結果を参考に、本アンケートも「愛着・誇り・行動」に項目を絞り、経年比較しながら関係性を見ていきたい。
- ・理解については学校現場の領域とすればよい。
→令和8年度から問4(3)「自分の市や町について理解が深まった」を削除

イ 協議会メッセージの波及

① メッセージの波及によって目指したい丹後の姿

- ・このメッセージを誰もが知っていることがゴールではない。知った上で、「子育て」の考え方を体現できるキーパーソンが増え、各地で活躍するところを目指したい。
- ・50年前を想像するともっと活気があったのではないか。気力溢れる元気で明るい4市町になってほしい。
- ・小・中学生のために何かしたいと思っている高校生もいる。大人がお膳立てせずとも子どもにできることがある。子ども達が安心して活動できる環境を大人が提供することは、活気が生まれる第一条件である。
- ・大人が期待感をもって子どもの育ちにワクワクできる丹後でありたい。
- ・コミュニティ・スクールは学校と地域が共に新しい未来を創ろうとするものである。学校と地域が目線を合わせることが大切である。
- ・本アンケートで「丹後地域が好き」の理由を問い、丹後地域の大人たちを元気づけて、誇りを感じさせる根拠になることを期待したい。丹後地域に誇りをもった大人が子ども達に関わる丹後でありたい。

② 効果的な協議会メッセージの発信の在り方

- ・「子育て」を支える環境づくりを体現するイベントは一つの手法として効果的である。例えばキーパーソンがトークセッションを行えば、参加者に本協議会のねらいが伝わりやすい。ただし、参加対象をどうするかによって伝わり方も変わる。
- ・イベントの効果でいえば、祭りも一つのイベントである。多世代が集まり、関わり合う中で若い子どもの中にも所属感や役割への意欲の高まりが生まれる。その「子育て」の姿に保護者も刺激を受ける。そういった機会の設定が発信の効果を生む。
- ・既存のPTAの懇談会の形に変化を求めたい。特に高校となると保護者のつながりが少ないので、丹後の共通する話題として協議会メッセージのキーワードを使ったワークショップをするのもいい。既存のフォーマットの中で「子育て」の話が得られる。
- ・人が集まる機会が大切で、その中でお互いの話を聴き合うことで気付きが生まれる。協議会メッセージを伝えていくと、自分の中で方向性が合っているのか悩む人も出てくるだろう。気軽に話せる場があって、このメッセージが話題にできるといい。

③ 協議会メッセージの発信の具体

- ・ポスターという形にするとすれば、誰に届けるのか、サイズはどうするのか、どこに貼るのかを精査する必要がある。また、目立たず、壁と変わらないものでは効果がない。

- ・届ける対象としては学校教育、こども園・保育園、社会教育施設になるだろう。
- ・駅や子どもの健診の待ち時間に見える場所に貼ってあってもいい。
- ・貼る場所がなければインターネット上に掲載できればいい。SNSは、対象の年齢を絞るなどターゲティングが明確にできるよさがある。
- ・こういったポスター作成会議の段階からプロに同席してもらって作るという手法もある。
- ・レイアウトとして小・中学生と高校生が主体となってワークショップや活動をする画像が協議会メッセージのイメージに合うのではないか。「多世代」がキーワードとなる。他にはない状況・場面の方が目に留まる。
- ・効果的な発信となると、ポスターの前にイベント実施が先なのかもしれない。

5 指導助言（杉岡顧問）

ア 高校生意識調査アンケートについて

- ・今後も継続し、経年変化を見ていくべきである。
- ・設問の内容を見直し、設問を増やす一方で、減らす設問も検討するという視点は大切である。
- ・本アンケートの記述回答から人生の先達となる丹後のカッコいい大人の姿が見えてくるといい。そういった大人の話が聞ける丹後地域でありたい。

イ 協議会メッセージの発信について

- ・業者に委ね、形を作ることは簡単にできる。お金をかけずにAIでポスターも作れてしまう。しかし、そうやってできたものは一過性のものになりやすい。
- ・作成段階から丹後の子ども達を巻き込んでいく丹後の「巻き込みビリティ」を生かす。それを束ねるのが事務局である丹後教育局の仕事ではないか。
- ・子どもを巻き込む発想の例として、既存の応募型コンテストの発想を転換し、大人が応募して、審査委員長を子どもが担い、審査するといった立場を変えてみる形があってもいい。
- ・子どもが応募する形であっても、作文や絵画という限定的な表現だけでなく、俳句・彫刻・音楽など、子どもが主体的に表現できる多様な形での作品の応募という形もあるのではないか。
- ・子ども達が協議会メッセージを感じたままに自分で考えた表現方法で発表する場があり、その先に丹後のカッコいい大人の発表会のような文化祭があってもいい。
- ・そういった機会の中で、意見交流が設定されれば「子育て」の考え方が浸透する。

ウ 丹後の高校での探究活動について

- ・探究活動の在り方が高度化し、「高校の大学化」という言葉が生まれている。しかし、大学へ進学せず、就職を希望する生徒にとっては探究活動の本来の意義が腹落ちしていない状況も見受けられる。また探究がカリキュラムに置き換えられることで、やらされていると感じる生徒も多い。
- ・まずは探究活動には様々な在り方、取り組み方があることを周知する必要があるのではないか。研究という形、地域にどっぷり漬かる形、キャリアと接続する形等、

様々であっていい。

- ・丹後の高校での探究活動は京都随一と思っている。学びのダイヤの原石が散らばっている丹後で、今後も探究活動の尖りを追究していくべきである。

エ 「縮充」について

- ・どの市町でも「若者が帰ってこない」という声をよく聞く。地域の商店等が消えていく状況があり、若者も実感している。「縮小」の部分である。
- ・「縮小」する部分は受け入れながら、「充実」させる部分を議論していくことが、これからの丹後には必要ではないか。また、丹後なら可能であると思う。
- ・丹後では都市部ではできない自然の中での経験ができる。例えば、この自然を必要とする研究等と呼び寄せる土壌で、探究や研究への関心を高め、関係者を集めることができるのではないか。
- ・その結果を発信することで、住んでみたい、関わってみたい、話してみたいと思える人々を増やすことにつながると思う。

